川上 高司 ブログ アーカイヴ

2014年

7月1日

もう一つの火種一波乱要因を生み出すイスラエル

6月中旬、イスラエルの 10代の少年 3名が誘拐された。イスラエルは必死に捜索していたが 30日、ウエストバンク内で遺体となって発見され、イスラエル全土が悲しみにくれている。

イスラエル治安当局は実行したのはハマスであり、実行犯 2 名を特定し現在追跡中であると発表した。ネタニヤフ首相も誘拐はハマスの仕業であると断言、「代償は払わせる」と国民に誓った。閣僚の中には強硬手段にでるべきだとの意見が出ているもののいまのところネタニヤフ首相は強硬意見を押さえ込み、閣僚会議は葬儀の後に設定したようである。イスラエル軍はすでに報復としてパレスチナ地区を攻撃したとの情報もあり、現地はかなり不穏な情勢に包まれている。

ハマスは実行犯とされている 2 名がメンバーであることは認めているが、指示を したのがハマスであるかどうかについては言及していない。このはっきりしない状況 でイスラエルがパレスチナに対して攻撃をエスカレートさせてきたら「地獄の扉が開 くだろう」と、ハマス幹部は徹底抗戦を予告している。イスラエルとハマスとの熾烈 な闘争が始まってしまえば、ただでさえ不安定なシリア、イラクを含む中東地域がま すます混乱しかねない。ハマスはエジプトのムスリム同胞団に起源を持ち今でも彼ら との繋がりは強い。

イギリスのキャメロン首相は 10 代の少年の死を悼みつつ「イスラエルを全面支援する」と述べた。一方オバマ大統領は「子を失った親の悲しみは癒えない」と述べつ つもイスラエルもパレスチナも「冷静に対処するように」と、エスカレーションに釘を刺した。

誘拐が発生して以来、イスラエル治安当局は 400 人近いパレスチナ人を片っ端から逮捕してきた。最悪の結果になってしまった今回の誘拐の代償が小さくないことは誰よりもハマスが一番よくわかっているだろう。それゆえに彼らもまた来るべき報復行為に備えているはずである。そうなれば予告通り地獄の扉が開くことになりかねない。

オバマ大統領とネタニヤフ首相の関係はこじれているが、ネタニヤフ首相を説得できるのはアメリカしかいないのである。

7月11日

エスカレートするイスラエルの報復一沈黙を守るリベラル・ホーク

イスラエルの少年 3 人の誘拐・殺害事件の報復としてイスラエルはガザ地区の徹底 的な空爆を開始した。侵攻も時間の問題だとガザの人々は身構えている。 イスラエルは、3人の犠牲者の報復としてパレスチナの少年 1人を誘拐して殺害した。だが怒りの感情はそれでとどまらず、空爆が開始された。ハマスがロケット弾の報復を始めると空爆をエスカレートさせ、情勢は一気に不穏なものとなった。

ガザ地区では空爆による死傷者が病院や街に溢れかえっている。そもそも日常的に物資が不足しているところに空爆によって負傷者が増えたため、病院はパニックに陥っている。医薬品はもとより医療器具などが不足しさらには発電機を動かすガソリンすら不足し始めている。救急車を動かすことができなくなる日も近いという。

空爆の被害は直接負傷する負傷者だけではない。病院が負傷者の対応に追われ医薬品が使われるために、疾患を抱えた患者たちの治療が後回しになってしまっているのである。

ガザに住む 3 才の男の子はがんの手術を受けるはずだった。だが空爆による負傷者に追われる病院では、医薬品の不足のため手術の延期を決定した。父親は毎日病院へ行って手術をしてほしいと頼むが病院側の返事はノーである。こどもの命は危機にさらされている。

病院側によると抗生物質や麻酔薬をはじめ重要な医薬品が足りないのである。手 術のための電力すら確保できないという。すでに在庫が枯渇した医薬品もまもなく枯 渇する医薬品も少なくないが、入荷の目処は立っていない。さらに、今後イスラエル の攻撃がエスカレートすることが予測されるので来るべき時に備えて医薬品を残して おかなければならない。

そのため病院側は病院の業務を縮小して最小限度に抑えて医療品の節約をする段階に入っている。さらに空爆が続けばほとんどの病院を閉鎖せざるを得ないという。そうなれば失われていく命は空爆の犠牲者だけにととまらずさらに増える。ガザ地区の人々はまさに深刻な人道的危機にさらされている。今こそオバマ政権のリベラル・ホークたちの活躍を期待したい。

7月16日

ますますドイツの不信感を買うアメリカ

スノーデンの盗聴問題からおよそ1年が経ち、ドイツメルケル首相のアメリカへの不信感はいまだに消えていない。そこへドイツの連邦政府機関の職員2名がCIAに情報を流していたという事実が発覚し、再びドイツではアメリカへの不信感が募っている。

ドイツ政府は CIA に対して即刻国外退去を求めるという厳しい対応を取り、事態の深刻さをあらわしている。メルケル首相はアメリカに対して同盟国でのスパイ活動を止めるように求めている。

イギリスでは各国の情報活動を監視する「Five Eyes」というグループの会合が定期的に開かれている。イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの5カ国の議員の代表が集まっているのだが、そこへドイツも参加してもらおうと7月7日、会合前のレセプションパーティにドイツの議員を招待した。

だが、手違いからドイツの代表団は会場ではなくまったく別の場所へ連れて行かれ代表団はそのままパーティを欠席してしまった。一方アメリカをはじめとするメンバー国は、招待客が一向に到着しないのでドイツ団はボイコットしたと捉え、ドイツの怒りの深さに不安に陥ってしまった。そこへちょうど CIA スパイ問題が発覚し、

アメリカは対応に追われている。

ウィーンでは折しもイラン核問題を巡る 6 カ国協議が開かれていた。ケリー国務 長官はドイツのステインマイヤー外相と仲の良さをアピールし、「ドイツとアメリカ は良き友人で、政治的な協力関係は不動」と強調した。またステインマイヤー外相も 「両国の信頼関係は盤石」と述べ、スパイ問題の影響を否定している。

だがドイツ国民の感情は異なる。ドイツ・スピーゲル誌の世論調査によれば、アメリカと距離を置くべきと答えたのは57%に上る。ロシアと距離を置くべきと答えたのが50%であることから見れば、ドイツ国民の「アメリカ不信」が生まれつつあるのかもしれない。ブラジルでは、ワールドカップ決勝戦の観戦に訪れたメルケル首相と、やはり観戦に訪れたロシアのプーチン大統領が会談を持ちウクライナ問題を話し合った。東ドイツ出身のメルケル首相と、ソ連時代に東ドイツに駐在していたプーチン大統領の間になにか通じるものがあっても不思議ではない。

ドイツではオバマ大統領への人気が世界各国の中でも抜きんでて高かった。そのため裏切られたという思いがひときわ強い。アメリカはドイツに対して言葉を尽くして盗聴、スパイ活動について説明すべきであろう。

7月23日

ケリー長官の平和への願い

マレーシア民間機撃墜に世界がロシアへの批判をヒートアップさせているが、アメリカ政府は親ロシア派によるものだという可能性を示唆しつつも確実な証拠がないことを強調するようになった。結局だれがなんのために撃墜したのかは不明としつつ、ロシアの直接的な関与は否定しあくまで親ロシア派を支援したことの責任を負うべきだと、非難をトーンダウンした。

ヨーロッパもプーチン大統領の側近への経済制裁では一致したものの実際の実施 については意見がまとまらず実現の見通しは暗い。

一方イスラエルの地上、空、海からの猛攻撃にさらされ 500 名以上の犠牲者を出しているガザ地区での停戦交渉にケリー長官は中東に飛んだ。国務長官就任以来イスラエルとパレスチナ和平にとりわけ力を注いできたケリー長官は、停戦を実現できるか正念場を迎えている。

ケリー長官とネタニヤフ首相の出会いは 1970 年代のボストンに遡る。上院議員として頻繁にイスラエルを訪れるケリー氏をネタニヤフはイスラエルのよき理解者と好感を持って接するようになったという。そのケリー氏が国務長官に就任してネタニヤフ首相はおおいに期待したに違いない。

だがケリー長官の要求は厳しかった。入植に強く反対しパレスチナを国家として 認めること、収監者の開放などネタニヤフ首相にはとうてい受け入れられないことば かりだった。何よりもネタニヤフ首相を怒らせたのはケリー長官がパレスチナ人の感 情に理解を示したことだった。

ケリー長官はかつてベトナム戦争に従軍した。ベトナムでは現地の人々の怒り、 憎しみ、徹底的に闘うという決意のにじみ出た表情に面食らったという。彼らがアメ リカを、自分をどう見ているのか、その表情から悟ったというケリー氏はベトナム戦 争は間違っていると感じた。

その時のベトナム人の表情が今のパレスチナの人々と重なるとケリー氏はネタニ

ヤフ首相に語った。パレスチナ人がイスラエルをどう見ているのか、そしてイスラエルに対して自爆テロも辞さないという決意が理解できるというのだ。

だからこそ、紛争を終わらせなければならないとケリー長官は平和に向けて心血を注ぐ。「あのベトナム人の顔は生涯忘れることはできない」そう語るケリー長官に残された時間は少ない。

7月29日

3年後のリビアーアメリカ外交の結末

3年前の2011年、イギリス、フランス、アメリカを中心としてNATOはリビアの反政府勢力を支援するべく空爆を実施した。そして権力の座にあったカダフィは追い詰められ排除された。

ところがその1年後には当時の外交官だったスティーブンス氏が武装勢力によって殺害される悲劇が起こった。2014年7月27日、アメリカの大使館は閉鎖を決定し大使館関係者はトリポリの国際空港からチュニジアへ向けて脱出した。脱出時、国際空港の上空は米軍機が旋回して武装勢力を威嚇したため無事脱出できた。イギリス大使館関係者は陸路を選択して脱出を試みたが、武装勢力に襲われて命からがらの逃避行となった。国連も事務所を閉鎖、ヨーロッパ各国は自国民に対してリビアからの即刻退去を求めている。

それほどまでにリビアの状況は悪化している。NATOの空爆の後、権力と富を めぐる武装グループの抗争は激しさを増し、政治家は殺害され外交官は誘拐の標的と なり市民も命を狙われ、水も電力も供給されずリビアはもはや国家として機能してい ない。

リビアに「アラブの風」が吹き始めると 反カダフィの闘争のために欧米諸国はこぞって反政府グループを支援をした。やがてその支援を奪い合って反政府グループ同士で抗争が始まった。民主化は順調に進んだように見えたが実は核となる強い政府が不在だった。そのためいくつかの民兵組織の力が強まりそこかしこの地方の勢力や実力者と結びついて権力をもつようになり彼らは権力闘争に明け暮れている。

彼らには石油の収入があるので資金には不自由しておらず欧米の支援に頼る必要がない。シリアの内戦では反政府側に対して支援をしている欧米の影響力が強いが、 リビアでは欧米の影響力はほとんどない。資金が豊富なので闘争に終わりがなくエスカレートするばかりである。

3 年前の欧米の力による体制の変更がリビアにもたらしたものはさらなる混乱と 悲劇だった。シリアとは異なりほとんど国際社会の関心がないがリビアもまた内戦に 苦しんでいるのである。

7月30日

ロスト・ウエポンーアフガニスタン戦争の末に

28 日、国防総省の特別査察官は、アメリカが 2004 年以来供与してきた武器類があまりにも過剰であり、しかもそのほとんどが行方不明になっているという事実をつきとめた。2012 年の時点ではアフガン軍と警察の規模は 352,000 人で、武器もその規模に見合う分だけ供給された。ところがその後規模は段階的に縮小されてきており2017 年には 228,500 人になる予定である。だが、国防総省の武器の供給は 2012 年の

時のままの数となっていたため供給過剰に陥っている。

2004年以来 6億ドルを超える予算で アメリカはアフガニスタンに対して 747,000 を超えるライフルや拳銃など小火器類を供給してきた。議会はその武器の追跡を国防総省に命じていたが、国防総省は追跡に失敗していたことになる。

たとえばAK-47は本来の数よりも 83,184 も多く供給されているはずだが、ほとんどが行方がわからない。武器庫にはM-16が939なくてはいけないはずなのに199しか発見できなかった。おそらく発見することは不可能だろう。

2003 年にイラクへアメリカが侵攻するとアメリカ政府はイラクにのめり込み、アフガニスタンへの関心を失ってしまった。政府や国防総省は資金を投入するだけでコントロールや監視をせず放置していたため供給した武器が消えるという恐ろしい事態が発生し、さらにその状況に気がつくのが遅れた。

手続き上の問題もある。アメリカ側の武器の供給の管理と供給後の管理のシステムが異なっていたうえ、アフガニスタン軍の管理システムも異なっていた。アメリカ側の管理はコンピュータ上の管理だったが、アフガニスタン軍は手書きの書類で管理していた。3つの異なる管理システムが混在しただけでなく、アフガニスタン警察に至っては管理システムそのものが存在しなかった。

シリアの内戦でアメリカは反政府側に武器の支援を継続している。武器支援を決定する際にその武器が誰の手に渡るかわからないという反対意見が出た。オバマ政権はきちんと追跡することを約束した。だがアフガニスタンの状況からわかるように、いったんアメリカの手を離れてしまった武器は追跡不能になる可能性が高い。いくら高度な追跡システムを使用しても結局は闇の中へと消えていく。末端まで責任のもてない武器の支援はするべきではない、とアフガニスタンの失敗に学ばねばならない。